家族

ファミリー

家族

ファミリー

山口瞳

文藝春秋

家族（ファミリー）〈書下ろし純文学長篇〉　奥付

昭和五十八年四月十五日　第一刷

著　者　山口瞳（やまぐち　ひとみ）

装幀者　田中一光

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵便番号一〇二

電話東京（〇三）二六五局一二一一

定価　一、五〇〇円

印刷　精興社

製本　加藤製本

製函　加藤製函

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Hitomi Yamaguchi 1983　Printed in Japan

書下ろし
純文学長篇

家族（ファミリー）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

「お兄様いらしてるかしら」
と、女房が言った。
「さあ、どうかな……」
来るかもしれない。来ないかもしれない。来ているといいんだけれど、と、ぼんやり考えていた。なにしろ、二十三回忌だからな……。
兄は長男であるのだから、本来、私がそんなふうに考えるのはおかしいことだった。法事などは、兄が取り仕切らないといけないのだけれど、そうなっていない。長男の役目は私がやっていて、父の遺産は弟が管理していた。管理すると言えば体裁はいいけれど、弟はそれを自分のもの

にしていた。兄の立場は宙に浮いたものになっている。

母方の親類は誰も彼もが十二月に死んでいた。母の兄の丑太郎も、妹の君子もそうだった。母のごときは昭和三十四年の十二月三十一日に死んだ。あれから二十二年になる。大晦日に法事をするわけにいかないから、母の場合は、いつでも十二月の初めの日曜日を選んでいた。去年（昭和五十六年）は、私の仕事の都合で、それが暮も押しつまった十二月二十日になった。兄は来られないかもしれないと思ったのは、そのためでもあった。

私と女房とが息子の運転する自動車で寺に着いたのは、約束の午後一時ぎりぎりの時刻になっていた。

庫裏の内玄関をあけると、広間のほうに十人ばかりの顔が見えた。

「来ていないようだな、兄さんは、やっぱり……」

「そうね。いらっしゃらないわね」

女房は軽く頭をさげたり、目で挨拶をしたりしていた。

「お墓のほうへ行ってみよう」

菩提寺は浦賀の顕正寺である。京浜急行浦賀駅からタクシーに乗れば五分とかからないところにあった。私はこの寺が好きだった。寺のたたずまいが良いというのではない。環境が良いわけでもない。左側が観音崎に抜ける切通しになっていて、自動車やオートバイの音響がうるさく、埃っぽいところだった。ただ、右手の裏山の風情が悪くない。それと、山門から本堂にいたる平らな庭の変哲もないといったところが良い。見てくれよがしのところがない。それは、『ホトトギス』の俳人であり詩人である住職の人柄のためであるように思われた。

私が最初に墓へ行こうと言ったのは、その、やや横に広い羊羹を切ったような自分の家の墓も

好きだからだった。墓が見たい。……それと、もし墓の周辺が汚れていたならば、手早く掃除をしておこうという考えもあった。そのへんの感覚が長男のものになっていると自分でも思った。

墓は綺麗になっていて、花があがっていた。それは、母の弟の保次郎の細君、つまり叔母のやってくれたものに違いなかった。

私は、墓の脇に母の好きだった樹木、杏でもいい、黄瑞香（みつまた）でもいい、あるいは少し派手になるが枝垂れ桜でもいいが、何かを植えたいと思っていた。しかし、住職は賛成してくれなかった。私は、何か墓地での規則とか縁起のようなものがあるのかと思っていたが、そうではなかった。住職は、樹木を植えると、根を張って、墓の土台を傷めるのだと言った。ここにも、見てくれではなくて実質を考える住職の人柄を見たように思った。

そのとき、墓にいたのは、私と女房と息子の三人だった。母は、よく、あんたたちと四人で静かに暮したいと言ったものである。私も、母を、私たちだけのものにしたいと思いたがるところがあった。

私たちは、いそいで庫裏に引き返した。

いないと思った兄がいた。兄は、広間の奥で保次郎の次男と将棋を指していた。その男の姿は、私の目にも入っていた。女房も見ていた。

兄は、すっかり面変りしていた。それは糖尿病のせいだった。糖尿病になりやすい体質は遺伝するそうで、兄も私も弟も糖尿病に罹っていた。父は若年からの重症の糖尿病だった。ただし、兄だけは母の子ではない。

私は人の顔を憶えるのが不得手で、誰か遠縁の老人が来ているのだと思っていた。兄は、青年時代は、眉毛の太いタイロン・パワーふうの美男子で女子学生に騒がれるようなところがあった。

それが、痩せてしまって面変りしている。
「やあ……」
私は兄のところへ近づいていって挨拶した。よく来てくれたなあと思った。血筋で言えば母と兄とは無関係である。
ひどい将棋だった。保次郎の次男は素人初段ぐらいには指すので、平手では勝負にならない。大差になっていた。そのへんが、兄の人の善いところだった。
「おい……」
兄は私の名を言った。
「教えてくれよ。……強のなんのって、おじさんはとてもかなわない」
その部屋には、兄と嫂、弟と弟の妻、弟の長男の嫁、上の妹とその娘、下の妹、叔父の保次郎の細君とその息子の合計十人がいて、住職と私たちを合わせると十四人になっていた。昼食用の幕の内弁当は十三人分しか頼んでいなかったが、それでなんとかなるはずだと思った。
将棋に負けた兄が立ちあがって、こんなことを言った。
「もし、これで、世界大戦が始ったら、おじさん、どこの国に味方していいかわからないよ」
下の妹の亭主はアメリカ人であり、その息子も娘もアメリカ国籍である。その息子の婚約者もアメリカ人であり、米国に留学中の娘の恋人は、スコットランドの生まれでありインディアンの血も混じっているという。弟の長男の嫁は妊娠中であるが、彼女はドイツ人の娘である。私の息子は、あるとき中国人の娘と交際していた。
兄がそう言ったので、誰もが顔を見合わせた。
「おじさん、困っちまう」

この兄は、ときどき気の利いたことを言った。あれは母の七回忌だったろうか、その法要は、寺の近くの料亭で開かれて、もっとずっと多く、三十人ばかりが集った。兄が挨拶することになった。

「いざとなると、これだけの人が集るということがわかりました」

兄は、のっけにそう言った。その一言で充分だった。それは、こういう際の常套的な言葉なのかもしれないが、私は妙に感心した。私は、内心は、変なことを口走りはしないかと思い、ハラハラしていたのである。

あるとき、やはり、何かの法事のとき、弟が、

「俺たち、第二梯団だとばかり思っていたのに、いつのまにか第一梯団になっちゃった」

若い人にはわからないだろうけれど、戦争中に、そういう言い方があった。敵第一梯団は京浜地区上空に飛来中という言い方である。弟の言う第一梯団であるところの人たちは、父母をはじめとして、あらかた亡くなってしまっていた。残っているのは、母の妹の亭主と母の弟の保次郎だけになってしまっている。その保次郎も何度かの大病のあとで、いまも入院中である。もう、あまり意識が戻らないようで、こんどの法事には何としても出たいと言っていたそうだ。これが最後だと保次郎は思い定めていたようだ。

「こんどは、いよいよ、俺たちの番だ」

弟がそう言ったのは十年も前のことである。その日の弟は馬鹿に神妙にしていた。

「さあ、そろそろ、はじめましょうか」

兄が言ったので住職が立ちあがった。

私も勢いをつけて立ちあがり住職のあとに従った。私は、特に法事のときは、なるべく気楽に、

気さくに振舞おうと心がけていた。

住職は私を頼りにしていた。それは、ひとつには、兄に子供がいないからだった。

「兄さんには子供さんがいないからね。あなたが中心になってください。そうでないと墓守りが絶えてしまう」

住職は私にそう言うのであるが、それは、まあ、一種の方便だろう。

兄の立場は居心地の悪いものであるに違いない。私にしたってそうだ。余計な神経を使わなければならない。弟だってそうだろう。

事業の失敗を続けていた父に財産があるわけがない。しかし、東京の南麻布に百坪ばかりの土地が残っていた。父の借金は、その土地の値を遥かに上廻るものであった。借金取の攻勢を逃れて、その土地を守り通したのは、たしかに弟の手柄だった。私には、その種の揉めごとには耐えられなかったし、文学賞を受賞した頃のことで、とても、揉めごとの相談に乗ってやれる状態ではなかった。兄は、ずっと家を出ていたし、出生のこともあって、父母や私たち兄弟に対して常に反抗的な態度を示していた。どうやって遺産相続が可能になったのか、相続税はどうなったのか、私にはわからないが、弟は、それをすべて自分のものにした。そのことについては、弟としても言いぶんがあるに違いない。

大通りに面した南麻布の土地は、道路の拡張によって東京都に買いあげられることになったが、おそろしいような土地の値の高騰により、一億円とまではいかなくても、それに近い金額を弟は得たはずである。その経過や決算報告を、弟は、どんなに追及しても明らかにしなかった。まことに頑強だった。

私は父の遺産をアテにするような考えはなかったが、ほかの同胞はそうはいかない。まして、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

弟の義父が、
「これで、やっと私も安心しました」
と言ったときには誰もが腹を立てた。弟は、
「俺、一人で胴を取ってみたかったんだよ」
と、ヤクザっぽいことを言ったりした。弟の一家はハワイ移住を企てて失敗した。造園業を営む計画であったらしいが、永住権が取れなかったのだろう。弟は何も言わないから想像で言うよりほかはない。
帰ってきた弟は、
「何千万円かでパイナップル一箇買ったと思えばいいや」
と嘯くようにして言った。
母の父の職業は、その当時（大正時代から昭和初期まで）の言い方で言えば貸座敷である。私は迂闊にも、貸座敷というのは、アヴェックの密会のために部屋を提供するもの、つまり当今のラヴホテルのようなものだと解釈していた。しかし、貸座敷というのは、はっきりと女郎屋のことである。母方の先祖には松阪屋仙造という侠客がいる。母の兄の丑太郎は、いかにも女郎屋の長男にふさわしいような人物だった。小心で計画性がなく、見栄っぱりの洒落者だった。この丑太郎が弟を可愛がった。近年、弟は、いよいよ丑太郎に似てきた。違うところは金銭面で抜け目がないという点だろうか。

私は住職のあとに続いて本堂に通ずる渡り廊下を歩いていった。私としては、そうやって、一番奥に坐り、焼香台の前に兄に坐ってもらうつもりだった。

本堂の天蓋は父が寄贈したものである。たぶん、昭和十六年ごろ、父の景気の絶頂期に寄贈されたもので、いまなら一千万円以下では出来ないだろう。それには父の名が刻まれている。

顕正寺が改築されることになった。およそ百年前の建物で、早晩、建て直さなければならないことはわかっていた。住職と保次郎とからその相談を受けたとき、私たち同胞は、みんな反対した。

「あの頽れかけた本堂に味があるんじゃないか」

弟はそう言った。

「あたしたちは嫁に行った人間ですから」

平生は何かと口うるさい妹たちも、その件になるとそう言って引込んでしまう。それは当然であり仕方のないことだ。

私は、父母の世代がその百年の間にすっぽりとおさまってしまうのが何だか不都合であるような思いをしたが、寺から言われただけのものを提供した。また、そのことを儀礼的に兄と弟に知らせた。兄は、三分の一の金額を端数まできちんと計算して送ってきた。嫂は、そういう点で確りしていた。私は、それを請求したのではなくて、報告だけのつもりだったが、弟のほうは知らん顔である。

あるとき、従妹の一人が、私に、

「あんたは、あの顕正寺のお墓には入れないのよ」

と言った。言われてみればそういうことになるのかもしれない。私は長男の役目を果してきたが、世間的な目で見れば分家である。叔父の保次郎は、すでに顕正寺に墓地をわけてもらっていて、

「お前、俺の隣に来いよ」
と言った。私もそのつもりになり、そのあたりの墓地を見たりもしたのであるが、どうも釈然としない。私は父母の子であるが、兄は父の子ではあっても母の子ではない。顕正寺は、母方の縁につながる寺である。母の祖母にエイという傑物がいて、この女性が横須賀の柏木田遊廓の藤松楼を切り廻していたのであるが、エイの弟が顕正寺の養子になった。それが先代の住職である。こんなふうに、明治の頃は、女郎屋と寺とは密接な関係があったのである。ついでに言えば、先代の住職には子が無くて、母の弟の保次郎が養子に貰われてきた。世間にはよくある話だというが、保次郎が養子になった直後に、先代の住職に子供が生まれた。その人は大変に無口な男であったが大酒呑みで早逝した。その人の弟が現在の住職である。
そういうことなので、顕正寺のその墓に兄が入って私と私の妻子が入れないというのが、どうも釈然としない。
そこで、私は、寺内の別の土地に大きな墓を建て、その脇にもうひとつの墓をこしらえることを思いついた。しかし、適当な墓地がない。そのうえ、この考えを実行するとなると、金銭的な負担が大きすぎる。
私は住職に相談した。
「あなたは、当然、この墓に入る人ですよ。しかし、もう一杯で中は狭くなっています。この際、墓地も広げ、中も広くしたらどうですか」
住職の提案は有難いものだった。寺からの見積書が届き、兄と弟に経過を報告した。そのときも、兄は、きっちりと三分の一の金額を私宛に送ってきた。弟からは音沙汰がない。だから、私は、弟に、

「おい、お前はこの墓に入れないよ」
と言ってからかうのである。すると、小心者の弟は、にわかに心細いような顔つきになるのであるが、費用を分担しようとは言いださない。まことにガードが固い。
本堂を改築するときに、天蓋の修理も行われることになった。私も女房も、その費用は私のところだけで支払うつもりにしていた。それは、ひとつには、母が終生秘密にしていた、女郎屋で生まれ育ったということを、私が小説の形で暴くようなことになったからである。罪ほろぼしの意味で、何かをしたいと思っていたからである。
それはいいけれど、そのために、私の名が天蓋に刻まれることになった。思ってもいないことだった。
私が住職の直後に従って、早足で、できるだけ陽気な感じで本堂に入っていこうとしたのは、そのためでもあった。最初に兄に天蓋の名を発見されてはまずいと思った。私は下を向いて歩いていった。私たち同胞は、いくらか自慢する気味もあって、天蓋を見あげて父の名を見るのが習慣のようになっている。
さいわい、誰もが私の名に気がつかなかったようだ。
私は、立派になった本堂の一番奥のところに坐った。続いて兄夫婦が坐った。兄夫婦の前に焼香台があった。
「ちょっと……」
女房が私の膝を突いた。その意味はすぐにわかった。私は、三十センチばかり後退した。
思えば、こういう、焼香順に類することで、どれくらい思い悩まされたことだろうか。母のとき、父のときがそうだった。どのときでも私たち夫婦が取り仕切るのであるが、形としては、家

を出ている兄を立てることになる。事情を知らない遠縁の者、近所の人たち、会社の同僚は、どう思っただろうか。

「夫外典三千余巻には忠孝の二字を骨とし内典五千余巻には孝養を眼とせり。不孝の者をば日月も光を惜しみ地神も瞋をなすと見えて候。父母の御恩は今始めて事あらたに申すべきには候はねども、母の御恩の事殊に心肝に染みて貴く覚え候。飛鳥の子を養ひ地を走る獣の子に責られ候事目もあてられず魂も消ぬべく覚え候。其に付ても母の御恩忘れ難し」

読経がはじまった。この経文は、日蓮上人の手紙だと聞いたことがある。母の一周忌のときのお経がこれだったと記憶している。そのときは、女房も妹たちも泣いた。子供にとっては、かなり辛いお経である。

私の兄ぐらい不幸な男はいない、と私は思っている。先に書いたように、私の母は、横須賀の柏木田遊廓の藤松楼という女郎屋で生まれ育った。どういうキッカケでそうなったのか知らないが、父はその母と駈落ちすることになった。そのとき、母の胎内には私がいた。また、父には妻子がいたのである。そうして、父の妻も妊娠中であったのである。父は妻を実家に帰し、速達で離縁状を送った。大正の末のことで、当時は、そんなことで済んでしまったらしい。母は父とともに逃げ、私を産んだ。私が生まれたばかりのとき、乳幼児であるところの兄が届けられた。そのため、私の生年月日は約一年遅れで戸籍に記載されている。

その後、兄は、家を出たり入ったりしていた。父の景気の良いときは、祖母（父の母）とともに乗り込んでくる。この家の竈の下の灰まで僕のものだ、といったようなことを言う。祖母や父方の親類の者に焚きつけられたのだろう。おい、負けるんじゃないぞ、お前が一番偉いんだぞ、はじめに一発ガンとやってやれ……といったようなことだったのだろうけれど、およそ、こんな

に居心地の悪い立場というものはなかったろう。
私の家では、私以外の者は、すべて、長唄や日本舞踊などの芸事に親しんでいた。母は、その出生からしても、もっぱら粋を旨としていて威勢がよかった。鉄火肌だった。北条藩の武家の娘であった固い一方の田舎者の祖母に育てられた兄は、良く言えば洗練された、普通に言えば自堕落で野方図な私のところの家風には終生馴染むことがなかったようだ。兄が反抗的になったことを責める資格のある者は誰もいない。
「世界大戦になったら、おじさん、困っちゃう」
と言えるようになった兄を尊敬し、評価しないわけにはいかない。同時にそれは、確執の続いた五十年の歳月をも意味していた。だいぶ以前のことになるが、兄はこんなことも言った。
「アッチ（弟のこと）があんなふうになったのは、俺たちが悪いんだぜ」
弟は幼年時代は虚弱体質だった。体が小さい。私たちは運動神経には恵まれていて、小学校の運動会の徒競走では皆が一等賞を貰うということがあったが、弟だけはそうはいかなかった。また、弟は無精なところがあって、ろくすっぽ顔も洗わない。弟だけが虱をわかすということもあった。そのうえ、かなり強度の吃音者でもあった。見かねた母が、弟に上等な洋服を買ってきたことがあったが、どういうわけか似合わない。それも、かえって嘲笑されるもとになった。子供は残酷なものであって、特に潔癖なところのある上の妹は、ことがあれば弟を叱った。ある時期、弟にはニンジンという渾名がついた。ジュール・ルナールの『にんじん』の舞台や映画が評判になった頃だった。
「あいつはね、大人になったら俺たちに復讐しようと思っていたんだぜ」
意識していなくても、そういうことがあったかもしれない。兄は、俺たちが苛めたり嘲笑した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com